地方都市における市街地の賑わい創出に向けた社会実験プロセスに関する考察 －大分県津久見市観光周遊性創出事業を事例として－

近藤　美沙希[1]・石橋　知也[2]・柴田　久[3]・河原　有佑[4]

[1]学生会員　福岡大学大学院工学研究科建設工学専攻（〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1）
E-mail:td164006@fukuoka-u.ac.jp

[2]正会員　福岡大学助教　工学部社会デザイン工学科（〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1）
E-mail:tomoya@fukuoka-u.ac.jp

[3]正会員　福岡大学教授　工学部社会デザイン工学科（〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈八丁目19-1）
E-mail:hisashi@fukuoka-u.ac.jp

[4]正会員　株式会社建設技術研究所中部支社（〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田五丁目8-29）
E-mail:ysk-kawahara@ctie.co.jp

本研究では，大分県津久見市観光周遊性創出事業を事例に地方都市の市街地の賑わい創出に向けたプロセスならびに地域住民らと協働し検討した社会実験に着目し，その要点を明らかにした．その結果，1)活性化を目的とした社会実験の推進にはコアメンバーの形成と第三者の助言に加え，効果的なタイミングで実験を実施することが有効であると示唆でき，2)事業の早い段階で目に見える形として空間が形成されることは，地域住民ならびに行政関係者の当事者意識を促し，住民主体のまちづくりを促進させる可能性が挙げられ，3)複数年の社会実験において効果の得やすい対象地を選定したことならびに都市計画の用途地域の変更等，社会実験終了後の取り組みをも見据えた戦略的かつ長期的な計画の重要性が示唆された．

Key Words : *Vitalization in Local City Centers, Tourism, Pilot Program, Tsukumi City*

1. はじめに

近年，わが国の総人口は減少傾向にあり，超高齢化社会を迎えている．こうした人口減少と少子高齢化について内閣府は経済成長に対してマイナスの影響を与えるとしている．さらにこのような問題は，地方都市での空き家，空き店舗の増加等にも起因し，中心市街地の衰退が懸念されている．この対策として地域活性化に向けた社会実験の取り組みが全国的に実施されており，佐賀県佐賀市ではコンテナを活用したまちなかの賑わい創出やまちなか再生を目指した取り組みが行われている[1)]．そうしたなか大分県津久見市では，定住促進のための市街地の魅力向上や今後の観光施策および中心市街地活性化策につなげる市民参画の推進を目標とした「津久見観光周遊性創出事業(以下：本事業)」が進められている．本事業は3ヶ年計画で社会実験を実施する予定であり，本研究ではその1年目のプロセスを詳述し，地方都市における市街地の賑わい創出に向けた社会実験プロセスの要点について考察することを目的としている．

2. 津久見観光周遊性創出事業の概要

(1) 津久見市の位置的・歴史的概要

津久見市は大分県南東部に位置し，総面積は79.47km^2(平成27年10月現在)，で人口は18,758人(平成28年3月現在)の地方都市である．東側は豊後水道に面しており，津久見湾の湾口部を囲うようにしてリアス式海岸が形成されている．また長目半島の延長上には地無垢島，沖無垢島が，四浦半島の延長上には保戸島が浮かび，合

計3つの島が存在する．市域は背後にそびえ立つ鎮南山(536m)，姫岳(620m)，碁盤ヶ岳(716m)，彦岳(639m)といった山々により三方から囲まれている．津久見市はこれらの地形条件によって台風や季節風から守られており，九州の中でも比較的温暖な気候に恵まれ，自然災害の少ない都市となっている(**図-1**)．

江戸時代から明治時代に掛けて，山傾斜を利用したみかん栽培や豊富な石灰岩による石灰づくりが進展し，大正5年の日豊本線臼杵・佐伯間開通によりみかん栽培やセメント産業は発展を遂げてきた．津久見IC近くにある石灰石の採石場は津久見市の工業を長年支えてきた様子を今なお伺わせている．さらに無垢島，保戸島は日本有数のマグロ漁獲量を誇っている．

(2) 津久見市中心市街地の概要

津久見市中心市街地はJR津久見駅を中心に広がっており，代表的な場所としてつくみん公園や商店街等が存在している(**図-2**)．つくみん公園には複合的大型遊具や「つくみ港まつり納涼花火大会」等のイベントを目的として多くの人が来場している一方，商店街は過疎化等により衰退している．津久見市の主要な幹線道路である国道217号線は，商店街とつくみん公園の間に位置し，市民と観光客の両者にとって欠かせない存在として，日常的に利用されている．さらに平成14年の津久見IC開通や平成27年の東九州自動車道大分県内区間全線開通などを契機に，津久見市に来訪する観光客は増加している．

(3) 津久見市中心市街地(商店街)の変遷

昭和35年頃津久見市の人口は37,164人を数え主要産業である石灰石・セメント産業に従事する多くの従業員で商店街は賑わっていた．昭和40年代に突入すると市中心部にはスーパー・パチンコ店・ボウリング場・映画館などが立地し，飲食店や商店街と連携し最盛期の賑わいを創出していた．しかし，徐々に国内のセメント消費が減少に転じ，全国的な高度経済成長期であったこともあり若年労働者の市外流出が始まっていった．昭和52年には国道217号線臼津バイパス(臼津トンネル)が開通し，臼杵市への移動時間が大幅に短縮されたが，人口や消費の市外流出に拍車がかかる大きな要因となった．平成初期にはバブル景気に支えられていたが核店舗であった「寿屋津久見店」が撤退したことにより，中心市街地の空洞化が本格的に始まっていった．平成14年に「津久見市中心市街地活性化基本計画」が策定され，行政，TMO，民間それぞれが主体となり推進していくとしていたが，効果的な実施には至らず計画策定から10年以上が過ぎている．現在の市中心部での消費傾向は食料品などの日用品が主であり，市民の動線は国道217号沿線に集中していると考えられる．今後さらなる高齢化を迎え商圏が縮小するとともに，古くから営業している老舗店舗の後継者不足の問題もあり，10年後には殆どの店舗が閉鎖に追い込まれる可能性が高い状況となっている[2]（**写真-1, 2**）．

図-1 津久見市の位置図

(4) つくみん公園の概要

つくみん公園は平成16年にオープンした市内で最大規模の公園である．この公園は津久見IC近くの場所に位置しており，また約80台の駐車場を完備しているため，市外からのアクセスや公園利用に優れている．夏期になると津久見市で最も大きな祭りである「つくみ港まつり」が開催され，特に「納涼花火大会」ではつくみん公園が多くの人で溢れている．休日，祝日ではつくみん公園に

図-2 津久見市中心市街地図

写真-1 商店街の様子

写真-2 シャッター街の様子

写真-3 遊具に集まる来場者

写真-4 つくみん公園の様子

広がる芝生広場や複合的大型遊具を目的とした子供連れの利用者が多く，親子で来場する人が利用者全体の約8割を占めている．平日に関しても子供連れや，園児の遠足に利用される等，つくみん公園は人を集客する場として力を発揮している(写真-3,4)．

(5)津久見市における地域づくりの諸活動

津久見市では，行政及び地域住民によってこれまで様々なまちづくりの活動が行われてきた．平成20年7月3日には津久見港及びつくみん公園周辺が「九州みなとオアシス」として九州で6番目に認定され，大分県では大分港・別府港についで3番目であった[3]．加えて平成21年7月より津久見市都市計画マスタープランが作成開始され，原案作成時には地域ワークショップの開催やパブリックコメントを実施するなど市民の意見を反映する等の施策を行ってきた[4]．さらに「C-Lab.TSUKUMI」等の市民団体が存在し，まちなか清掃ウォークの企画やつくみん公園及び市街地の空き店舗を利用した定期的なイベントを行ってきた実績があり，またそれらの活動を継続的に支える行政職員の存在があった．

(6)津久見観光周遊性創出事業の背景

津久見市は観光振興として「つくみイルカ島」や「つくみん公園」等が核となり，市外・県外から多くの観光客を集客している．しかし，マグロ漁，みかん栽培などの地域産業の低迷や，市外への人口流出による急激な人口減少などにより，津久見市中心市街地には空き家，空き店舗が多く発生している．さらにこれらの問題による中心市街地の過疎化対策も津久見市の大きな課題となっている[5]．そのようななか平成27年に津久見市は大分県の補助によって本事業を立ち上げ，3年間の社会実験を実施し津久見市の中心市街地活性化に向けて検討することとした．

(7)関係主体の体制・役割

本事業は協議，現地踏査及びワークショップ(以下：WS)を津久見市役所都市建設課及び商工観光課(以下：市役所)，津久見商工会議所(以下：商工会議所)，津久見観光協会(以下：観光協会)，が集結した津久見市周遊活性化対策協議会(以下：協議会) と大分県中部振興局及び大分県臼杵土木事務所(以下：大分県)で運営している．また福岡大学景観まちづくり研究室及び大分大学建築・都市計画研究室(以下：大学)が本事業のアドバイザーとして参画し，協議会と共同で中心市街地の賑わい創出を目指した取り組みや組織づくり等を支援している．それぞれの役割として，市役所は事業に関わる情報，資料提供および日程調整，大分県はWSの実施主体としての準備及び協議会に対する補助金の交付，商工会議所及び協議会は市役所，大分県と共に社会実験の実施に伴う対策，検討を行うものとしている．また大学はアドバイザーとして，WSの実施にあたり社会実験や運営組織の具体的な提案や協議ならびにWSにおける成果物の作成などを行っている．

本事業のWSは大分県が実施主体であるがWSプログラムは市役所及び大学で作成し，WS前には事前協議として関係者間でプログラム内容の把握と共有を図っている．またWSメンバーは上記事業関係者に加え，津久見市街地商店主等の地域住民を交えており，WSは5人～7人を一班とする4班～6班に分け，各班のグループファシリテーターを大学から一人ずつ配置している．関係主体図は図-3に示す通りである．

3. WS・社会実験等のプロセス

本事業の現在に至る社会実験プロセスを表-1に示す．なお本章では，本事業の社会実験実施に至るまでの検討内容やWS等について時系列的に詳述する．

(1)本事業の内容把握及び検討

平成 27 年 3 月 24 日に大分県，市役所及び大学で本事業初となる協議を行った．まず市役所から本事業の概略説明，総合計画等の各種計画や市の展望についての説明がなされた後，津久見市内の空き地，空き家の増加，既存商店の減少など，津久見市が抱える課題についても共有が図られた．また県からは 3 ヶ年計画で実施される本事業の今後の方向性や WS スケジュールの確認がなされた．そこで次回 WS では大学からまちの活性化にむけたポイントについて説明した後，WS 参加者から津久見のまちづくりの目標やアイデアを抽出することとした．また次回の WS 参加者については，津久見のまちづくりについて積極的に発言・実行の意欲がある地域住民ならびに津久見市街地商店主(以下：コアメンバー)のみで構成するとし，協議会が参加者の選定を行った．その後，津久見市の課題である空き地，空き家および既存商店の確認を目的とした現地踏査を行った結果，駐車場などの商店としての機能を持たない場所が商店街の大部分を占めていることが把握された(写真-5,6)．

(2)まちづくりの目標の共有及び現状と課題の把握

平成 27 年 4 月 30 日に「津久見市のまちづくりのこれからを考える」と称した第 0 回 WS を行った(写真-7)．第 1 回 WS を開催する前段階として，本 WS ではコアメンバーに参加者を絞り，津久見市の賑わい創出のための具体的なアイデア等，幅広い意見を求めた．まず大学は市街地活性化に向けたポイントとなるであろう，賑わい，

波及，継続の 3 点の重要性を提起し，参加者に対してそれらを考慮した提案や意見を求めた．グループ作業では参加者に対して津久見市の現状の課題や良い点，市街地活性化のアイデアなどを抽出した．その結果，「つくみん公園に日常的に集まる人を中心市街地へ流したい」「何かをチャレンジしたい人に商店街の空き地，空き店舗を使えるようにする」等の津久見市全体の賑わいの波及に繋がる内容の意見が多く挙げられた(図-4)．

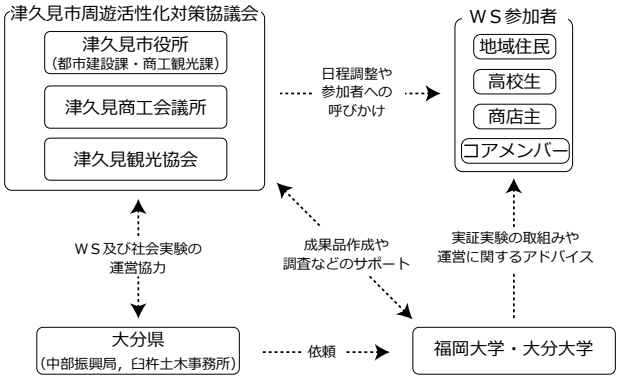

図-3 関係主体図

写真-5 関係者顔合わせ及び協議の様子

写真-6 現地踏査の様子

写真-7 第 0 回 WS の様子

(3) 第 1 回 WS に向けた協議

平成 27 年 6 月 11 日に大分県，市役所，観光協会及び大学で第 1 回 WS に向けた協議を行った(写真-8)．ここでは大学より第 0 回 WS の振り返りが行われた後，社会実験の具体的な取り組みの参考資料として仮設施設(コンテナ，テント，パラソル，キッチンカー)を活用したまちなか再生の先行事例の説明がなされた．また参加者間で 3 ヶ年を通じた市街地活性化の目標を検討し，1 年目には「つくみん公園の賑わい強化」，2 年目には「まちなかでの暮らしのたまり場の創出」，3 年目には「管理主体の検討」という目標案を作成した(図-5)．こうした協議の末，第 1 回 WS では 3 年間の目標案の確認と社会実験の具体的な取り組み内容について検討する方針とした．

(4) 社会実験の取り組みの検討

平成 27 年 7 月 6 日に開催された第 1 回 WS では，コアメンバーに加えその他地域住民，地元の高校生及び大学生を交えた構成で議論を行った(写真-9)．まず大学より第 0 回 WS の振り返りと事前協議で提示した仮設施設によるまちなか再生の事例紹介が行われた．また 3 年間の目標案についても参加者間で確認，共有した．その結果，「暑さ・寒さをしのげる」等の理由から社会実験の内容は，コンテナと移動可能なパラソルを設置する取り組みとした．また 3 年間の目標に関しては概ね了承を得た一方で，「2 年目の目標に早くとりかかってほしい」など，まちなか対策の早期実現を訴える意見も挙げられた(図-6)．

(5) 第 2 回 WS に向けた協議

平成 27 年 8 月 27 日に第 1 回 WS の結果を踏まえ大分県，市役所，大学及びコアメンバー3 名で第 2 回 WS の取り組み内容について協議を行った．一般市民より無償で提供を受けたコンテナの確認を行うため，まず本協議はつくみん公園にて開催された(写真-10)．本協議の参加者間でコンテナの大きさや劣化状況等の確認が行われた結果，コンテナを整備した上で社会実験に活用することで合意が図られた．コンテナの確認が行われた後，大学から設置箇所選定におけるポイントの説明がなされた．これよりコンテナの最適な設置箇所として 5 つの利点が考えられる築山上に設置することが参加者間で合意された (写真-11)(表-2)．続いて会議室に移動し，コンテナ

表-1 平成 27 年度プロセス表

日付・項目	協議・作業内容	成果(意見)・決定事項
3/24 協議① 現地踏査	・関係者間顔合わせ（津久見市，大分県，福岡大学，大分大学） ・全体計画の流れを共有 ・津久見市中心部まちあるき調査	・市街地活性化のための拠点作りに求められるポイントとなる日常性，波及性，継続性を意識した施策を行う ・WSは第0回から第6回までを予定 ・実証実験は夏期と冬期2回を予定 ・津久見市役所が選定したコアメンバーに協力を要請
4/30 第0回WS	・関係者と津久見市の商店主（コアメンバー）で地域の課題やまちづくり活性化の アイデアを抽出	・「つくみん公園を賑わいの拠点として位置づけていく」「つくみん公園に日常的に集まる人を市街地へ流したい」 「中心市街地内の空き地を活用して人々が交流できる場を作る」等，　津久見市全体の賑わいの波及に繋がる意見が 多く挙げられた
6/1～2 6/6～7 つくみん公園 ヒアリング調査	・つくみん公園の利用実態やニーズの把握を目的としたヒアリング調査を実施 ・つくみん公園の利用頻度や時間帯，目的，津久見市街地に求める物等10項目を調査 ・商店街の実態を把握するための実地調査	・平日で44部，休日で172部，計216部の回答を抽出 ・実地調査では，つくみん公園に人が多く集まっている一方で市街地側では人の回遊が少ない実態を把握
6/11 協議②	・第0回WSまとめ及びつくみん公園ヒアリング調査結果を報告 ・第1回WSでの検討内容を協議 ・福岡大学から実証実験の参考として仮設施設（コンテナ，テント，パラソル，キッチンカー） を使用した先行事例の紹介 ・3年間の目標案の検討	・事業の3年間の目標案を作成 1年目：つくみん公園の賑わい強化　2年目：くらしのたまり場の創出（まちなか）　3年目：管理主体の検討 ・第1回WSでは3年間の目標案の確認，共有ならびに社会実験で使用する仮設施設や取り組みの内容について 検討し，運営者，運営方法については協力者を募ることとした．
7/6 第1回WS	・第0回WSメンバーに加え地元の高校生及び大学生9名が参加 ・事業の3年間の目標案を確認，共有 ・社会実験の内容について検討	・3年間の目標に関しては概ね了承を得た ・社会実験の内容はコンテナと移動可能なパラソルを設置する取り組みに決定
8/27 協議③	・関係者に加え，コアメンバーより3名が協議に参加 ・つくみん公園に出向き，コンテナの大きさや設置予定箇所の確認 ・第2回WSでの検討内容を協議	・コンテナ内での取り組みとしてカフェ&ショップと雑誌コーナーならびに観光情報施設の併設案を提案 ・運営者については店舗経営者や団体等に協力を仰ぐ必要があるため第2回WSで協力者を募る ・コンテナの名称を募る
9/2 第2回WS	・つくみん公園に出向き，コンテナの大きさや設置予定箇所を確認 ・コンテナの設置予定箇所及び取り組み等の提案，アイデアの聴取	・コンテナは築山上に設置することで概ね了承を得た ・コンテナ内の取り組みはカフェ&ショップと雑誌コーナーならびに観光情報施設の併設案で運営することに決定 ・運営者,運営方法については個人名や団体名などの具体的な意見を促した
10/6 事業 打ち合わせ会①	・WS参加者と県・市職員の計25名が参加 ・これまでのWSの振り返り及び事業の3年間の目標を共有，津久見ふるさと振興祭での 取り組み内容，今後の運営について協議	・「コンテナ使用の内規が必要ではないか」「まちづくり会社設立に向けた準備を進めるべき」などの意見が出された ・「今後、自分が関われること」を持ち寄り，ふるさと振興祭での取り組みも含め次回事業打ち合わせ会で再度協議 ・コンテナの色は白，ウッドデッキは濃い茶系と決定
10/20 事業 打ち合わせ会②	・WS参加者と県・市職員の計20名が参加 ・事務局から「コンテナ活用の内規（案）」について説明 ・地域住民たちがこれから関われることや，津久見ふるさと振興祭での取組について協議	・コンテナ内での取り組みは休憩所と観光情報発信を主に試行し，徐々に内容を充実させていく方針とした ・コンテナ管理の当番を決め，当面は土日祝のみオープンさせ来訪者のニーズを探る ・ふるさと振興祭に合わせてコンテナをオープンし，コンテナの名称及びコンテナ内での取り組みのアイデアを 来場者に対しアンケート形式で聴取
10/24・25 社会実験開始	・雑誌コーナー及び観光情報を提供する場としてコンテナを開放 ・津久見ふるさと振興祭でのオープニングセレモニーで市長，福岡大学（柴田氏，石橋氏）， 大分大学（姫野氏），建設業協会青年部会長・副会長，津久見高校商業クラブの7名で テープカット ・コンテナの名称及びコンテナ内での取組についてのアンケート調査の実施	・10月24日に84部，25日に160部，計244部の回答を抽出 ・コンテナの名称については「つくみんの丘」「つくみんの家」などが多くの支持を得た ・コンテナ内での取り組みのアイデアとしては軽食等のサービスや既存イベントでの有効活用を求める意見が 多く挙げられた
11/10 事業 打ち合わせ会③	・WS参加者と県・市職員計20名が参加 ・前回の打ち合わせ会，津久見ふるさと振興祭アンケート結果，コンテナ管理者記録などの報告 ・コンテナの名称及びWSの開催，コンテナの今後の運営について協議	・コンテナの名称はアンケート結果を踏まえ①つくみんの丘，②つくみんコンテナ，③つくみん館，④つくみんの家， ⑤コンテナ293（ツクミ）号の5案に絞り，次回のWSまでに投票等で決定 ・「営利活動はどこまでが許容範囲なのか」「ただ開けておくだけではもったいないので，イベントをやりたい」など コンテナの運営や活用方法などについての疑問や意見が多く挙がった ・年内の土・日・祝日の当直当番の決定
11/21～24 コンテナ設置後 ヒアリング調査	・コンテナ設置後のつくみん公園来場者の利用実態ならびに意識等の把握を目的とした ヒアリング調査を実施 ・コンテナ設置前後の賑わいの変化やコンテナの満足度，津久見市の情報発信の評価等 13項目を調査	・平日で20部，休日で131部，，計151部の回答を抽出 ・コンテナ内の観光情報から市街地に興味・関心を示す人は多いが，実際に足を運ぶとなると躊躇する人の姿が 見受けられた
11/25 協議④	・本事業の今年度，来年度以降の取り組み，コンテナ活用の内規（案），第3回WSの取り組み 内容について協議	・第3回WSではコンテナの名称アンケートの実施ならびに内規案の共有及び内規に対する疑問点，改善点， アイデア等を抽出する
12/4 第3回WS	・コンテナの名称アンケートの実施 ・コンテナ活用に関する内規案のイメージ図を活用し，内規案の共有及び具体的なアイデアや 改善策の聴取	・コンテナの名称は「コンテナ293(ツクミ)号」に決定・公表 ・運営組織の設立が参加者の共通の認識であることを把握 ・内規案について「利用申請は随時受付がよい」「内規で使われている言い回しが硬い」等の改善意見が多く挙がった

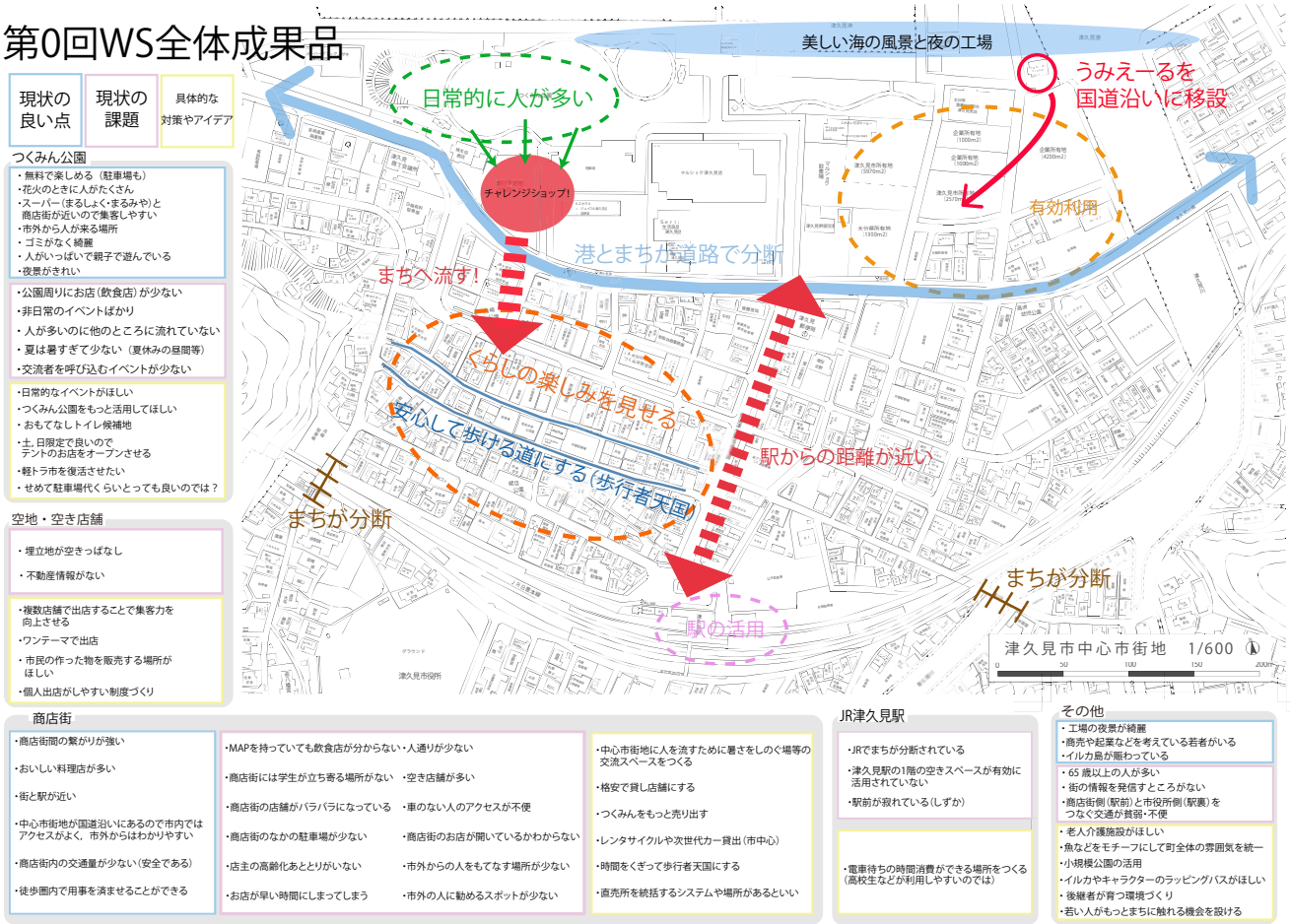

図-4 第 0 回 WS 全体成果品

内での取り組み内容や運営者，運営方法についても重点的に協議した．これより，取り組み内容についてはカフェ&ショップと雑誌コーナーならびに観光情報施設を併設する案で合意され，第 2 回 WS でこれらの案を提案することとなった．さらに運営者，運営方法については第 2 回 WS で店舗経営者や団体等に，協力者を募る方針とした．

(6) 社会実験開始に向けた作戦会議

平成 27 年 9 月 2 日に社会実験開始に向けたコンテナの設置箇所や使い方を検討する第 2 回 WS が開催された．本 WS の直前にコンテナの確認・共有を図るため任意参加でつくみん公園にて視察が行われており，コアメンバーとその他地域住民，地元の高校生及び大学生を交え議論が行われた．そこでは大学より事前協議で検討したコンテナの設置箇所の説明が行われ，提案通り築山上に設置することで WS 参加者から概ね了承が得られた．コンテナの確認を行った後，会議室でグループ作業に取りかかり，WS 参加者に対してコンテナ内の取り組みについてアイデアを聴取した．これより，カフェ&ショップと雑誌コーナーならびに観光情報施設の併設案で運営する方針とした．特に「ファッション誌やマンガ，絵本があると良い」等，雑誌コーナーの運営に関する意見を多く抽出できた．また運営者，運営方法については個人名や団体名などの具体的な意見が挙がるよう求めた．その結果，「本は創造工房さんや市民に募る」等，実現性の高いアイデアが多く得られた．さらにコンテナの名称についても議論し，「つくみん缶」「コネクトコンテナ」などの意見が挙げられた(**図-7**)．これまで実施してきた WS ならびに後述する事業打ち合わせ会のなかで，社会実験に対する協議が積み重ねられたことにより，コンテナの設置ならびに運営までが短期間で実施された．また設置されたコンテナは平成 27 年 10 月 24 日(土)～25 日(日)に開催される来場者数約 2 万人規模の津久見ふるさと振興祭に合わせて開放することを目標とした．

(7) 第 1 回事業打ち合わせ会

社会実験の実施前後に事業関係者が自主的に集まり，事業の近況報告や自由な意見交換を行う事業打ち合わせ会が計 3 回開催されている．平成 27 年 10 月 6 日には大分県，市役所及び WS 参加者の計 25 名で 1 回目の事業打合わせ会が開催された．ここでは，市役所が 3 年間の目標及び事業予算，コンテナ設置作業の進捗状況について説明し，続いてコンテナの名称や津久見ふるさと振興祭での取り組み，今後の運営などについて議論が行われた．これより，津久見ふるさと振興祭ではコンテナの名称を来場者から募集し，その後 WS で決定する事となった．また今後の運営について参加者からは「コンテナ利

写真-8 第 1 回 WS に向けた協議の様子

写真-9 第 1 回 WS のグループ作業の様子

写真-10 コンテナの大きさ等を確認する様子

写真-11 コンテナの設置箇所を検討する様子

表-2 築山に設置することの利点

1. つくみん公園全体を眺めることが可能でまち側からの視認性も良い
2. 遊具の見晴らしが十分に確保できる可能性がある
3. 水道、電気の引き込みがしやすい
4. 公園内でのイベントの際に邪魔にならない場所である
5. コンテナを公園緑地の端に設置することで将来的な用途変更に対応しやすい

図-5 本事業の３年間の目標（案）

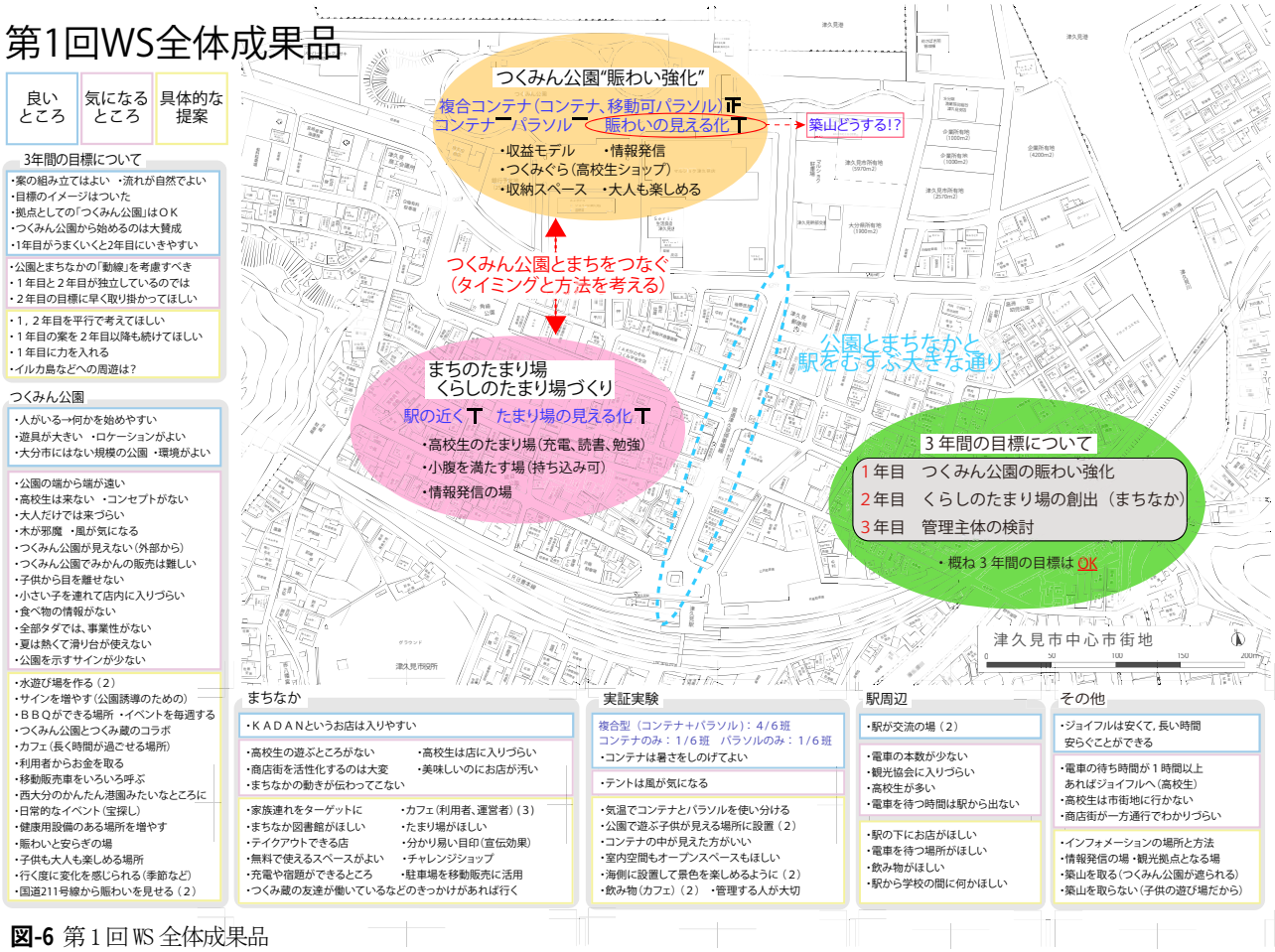

図-6 第１回 WS 全体成果品

用の内規が必要ではないか」「次年度はまちづくり会社設立に向けて準備を進めるべき」等，初期段階で管理主体の検討を行う必要性が看取された．そこで運営方法について社会実験開始前に再度事業打ち合わせ会を行い，次回までに「個人的に協力できること，関われること」を持ち寄ることとなった．

(8) 第 2 回事業打ち合わせ会

平成 27 年 10 月 20 日に大分県，市役所及び WS 参加者の計 20 名で 2 回目となる事業打ち合わせ会が開催された．前回の事業打ち合わせ会で「コンテナ活用の内規が必要」との意見が挙がったため，本事業打ち合わせ会では市役所よりコンテナ活用の内規案が提案された．その際「受付時期と利用期間など細かな部分の決め事も必要では」「まちづくり組織的なものが中間に絡んでくれるとありがたい」等，多くの意見が挙げられたため，内規の完成には時間を要すると判断し，当面のコンテナの運営については情報発信の取り組みや休憩スペース，雑誌コーナーを充実させる方針とした．また個人的に協力できること，関われることについての具体案として「チャレンジショップの開催」「コンテナ管理の手伝い」等，参加者の積極的な協力を募ることができた．さらに当面のコンテナの運営については土・日・祝日のみ開錠し，来場者の需要を探ることとした．

(9) 社会実験の開始

平成 27 年 10 月 24 日より，つくみん公園の賑わい強化を図ることを目的に設置されたコンテナの社会実験を開始した(**写真-12**)．社会実験開始日を津久見ふるさと振興祭の実施日に合わせることで，まちづくりの拠点となるコンテナの存在を市民に対して盛大に周知する機会となった．なお，コンテナのオープニングセレモニーでは，市長や福岡大学(柴田氏，石橋氏)，大分大学(姫野氏)，建設業協会青年部会長・副会長，津久見高校商業クラブの学生など 7 名でテープカットを行っている．コンテナ内は雑誌コーナー，観光情報を提供する場及び休憩スペースとして開放され，本を読む高齢者やウッドデッキに座る家族連れで賑わった(**写真-13, 14**)．コンテナの開錠時間は土・日・祝日の 10 時～17 時とし，主に協議会やコアメンバーが当番制で管理している．さらにコンテナの名称及びコンテナ内での取り組みについてのアンケート調査が実施され，2 日間で 244 部の回答が得られた．コンテナの名称については「つくみんの丘」「つくみんの家」等が多く支持を得ており，取り組みのアイデアとしては軽食の提供や既存イベントでの有効活用，授乳スペースなどの要望があった．またその他の意見として「津久見への帰省が楽しいものになるよう取り組んで欲しい」「思っていたよりも広く座れるスペースが良かった」など利用者からはコンテナに対する期待や賞賛

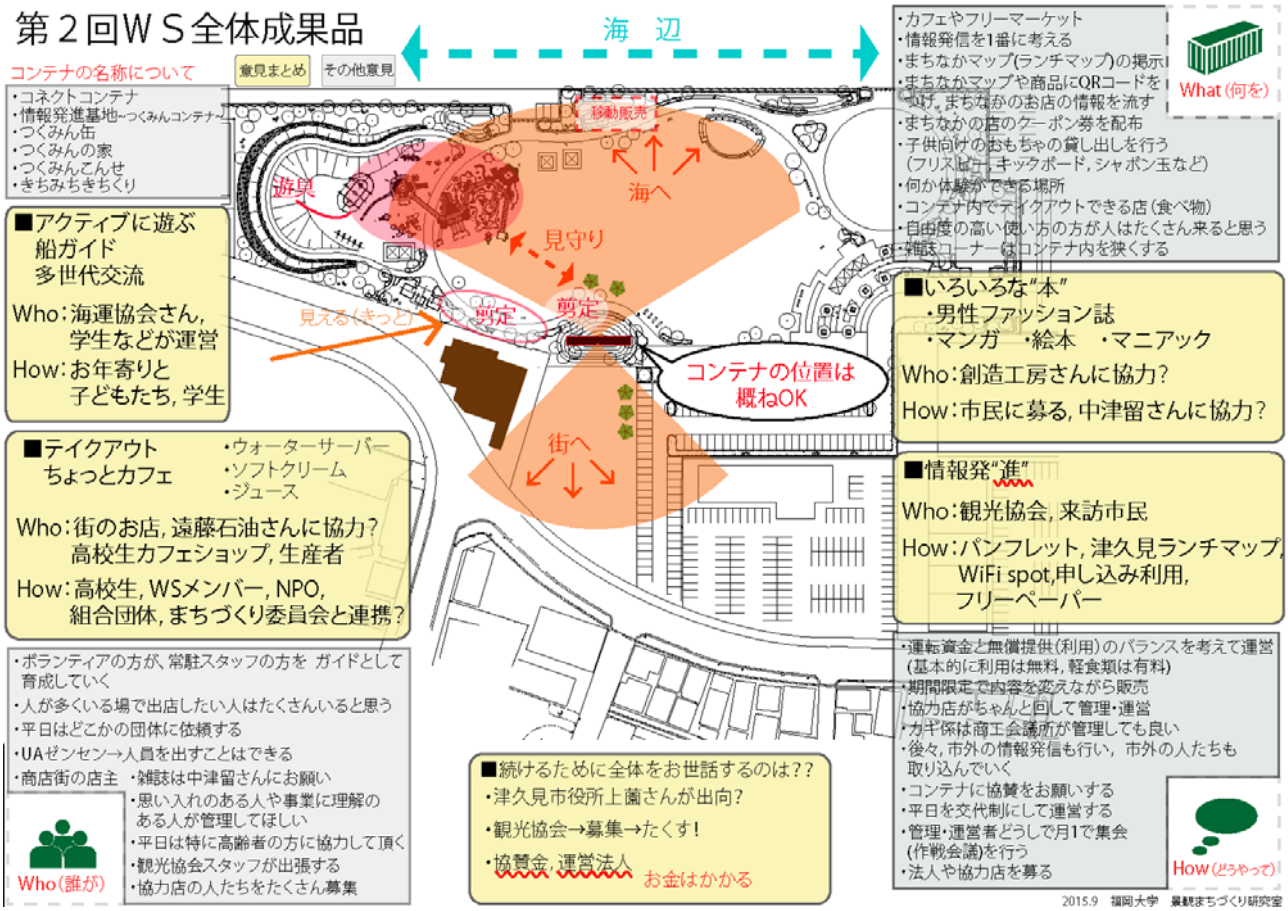

図-7 第 2 回 WS 全体成果品

の声が窺えた.

(10) 第 3 回事業打ち合わせ会

平成 27 年 11 月 10 日に大分県，市役所及び WS 参加者の計 20 名で第 3 回事業打合わせ会が開催された．本事業打ち合わせ会では津久見ふるさと振興祭で募集したコンテナの名称アンケート結果の報告及びコンテナ管理者による管理報告が行われた後，コンテナの名称及び今後のコンテナ運営について協議された．その結果，コンテナの名称については，アンケート結果を受け「つくみんの丘」「つくみんコンテナ」「つくみん館」「つくみんの家」「コンテナ 293（ツクミ）号」の 5 案に絞り，

写真-12 社会実験の開始

写真-13 コンテナ内の様子

写真-14 ウッドデッキの様子

次回の WS でこの候補の中から投票で決定することとした．また今後のコンテナ運営については，「コンテナをただ開けておくだけではもったいない」「街なか周遊につながる取り組みでなければ，この事業の発展や継続性が担保できないのでは」等，コンテナ運営の改善点や 1 年目の取り組みだけではなく，本事業の今後を見据えた意見も挙がった.

(11) 第 3 回 WS に向けた協議

平成27年11月25日に大分県，市役所及び福岡大学で第3回WSの方針について議論がなされた．第1回～3回までの事業打ち合わせ会において，コンテナ利用の内規づくりの必要性が地域住民から挙げられていた．これより，第3回WSではコンテナ活用に関する内規を提案し，これに対する疑問点，改善点，アイデア等をWS参加者間で抽出することとした．コンテナ活用に関する内規案は，市役所が作成し，WS参加者に説明しやすいよう福岡大学と共同でイメージ化した(**図-8**)．内規の内容については主に，コンテナを活用する事業者の利用手続きに関する流れについて詳述されており，市役所が従事している協議会の役割やWSメンバーを主体とする運営組織の設立の提案とその役割についても記述されている．さらに第3回WSではコンテナの名称の決定も行うため，WS参加者にアンケートを実施し，WS内で公表することとなった．コンテナの名称の候補としては，「つくみんの丘」「つくみんコンテナ」「つくみん館」「つくみんの家」「コンテナ293(ツクミ)号」等が挙げられ，これらの中から最多得票を獲得したものに決定することとした.

(12) コンテナ活用に関する内規案についての検討

平成27年12月4日にコンテナの名称決定及びコンテナ活用に関する内規案・運営イメージの共有を目的とした第3回WSが開催された．本WSではまずこれまで行われてきたWSを振り返り，その後コンテナの名称決定のためのアンケート用紙を配布し記入・投票を行った．続いて大学からコンテナ活用に関する内規案・運営イメージの提案を行い，グループ作業に取りかかった．そこではコンテナを活用する事業者の利用手続きに関して「利用申請は随時受付がよい」「内規で使われている言い回しが硬い」「利用許可の判断基準が不透明」など，内規を使いやすくする改善意見が多く挙がった．またコンテナの活用を管理・持続するにあたり運営組織を設立することが，WS参加者の共通の認識として挙げられ，「活動的な組織が必要」「社会実験終了後のまちづくり会社化」など将来の運営組織の方向性についての具体的な言及もあった．今後WSでの協議を踏まえ，津久見市が内規案・運営イメージの改良を行い，運営組織についても着手していくこととなった．またWSメンバーを中心に

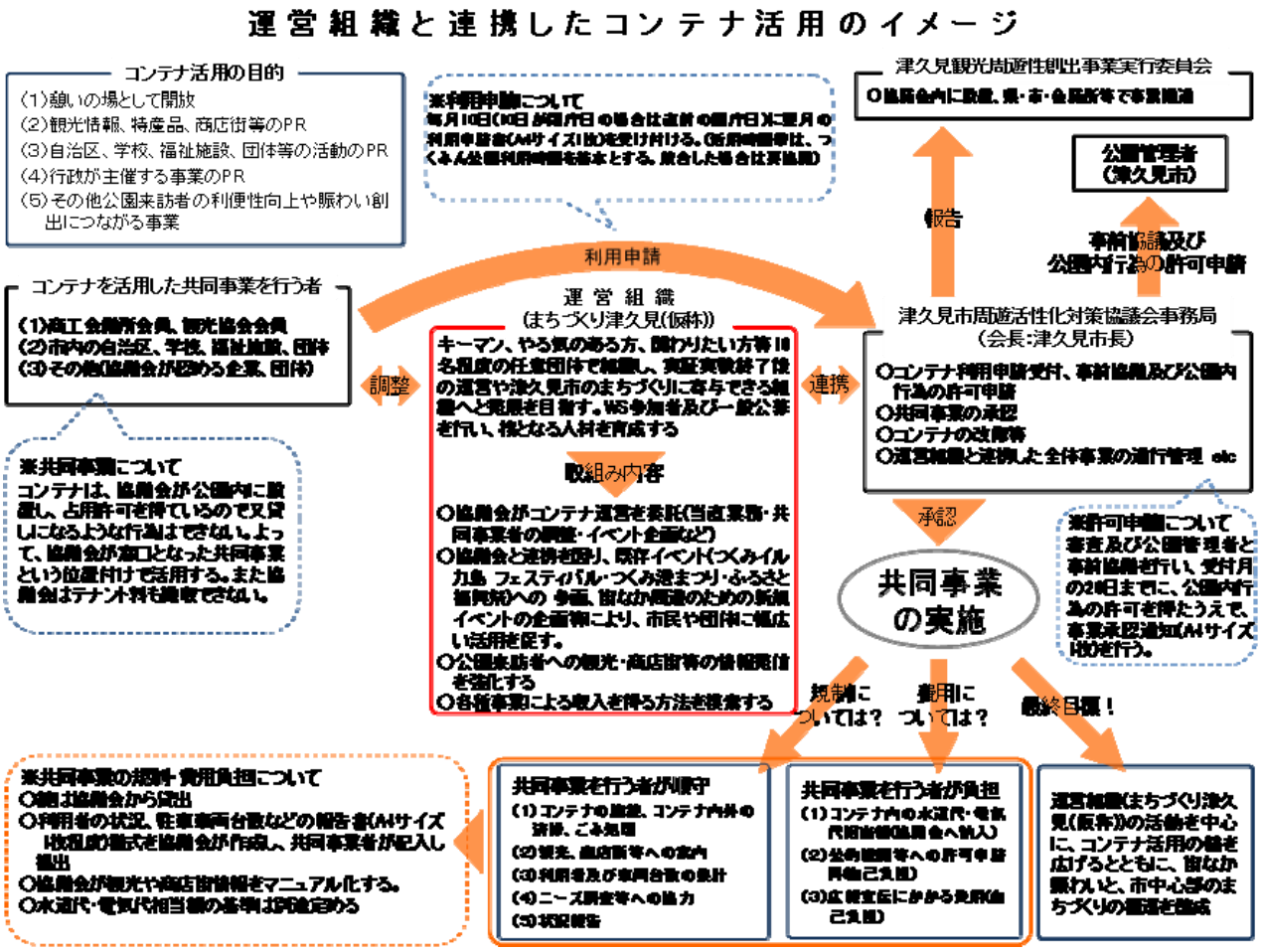

図-8 内規に基づいたコンテナ活用のイメージ

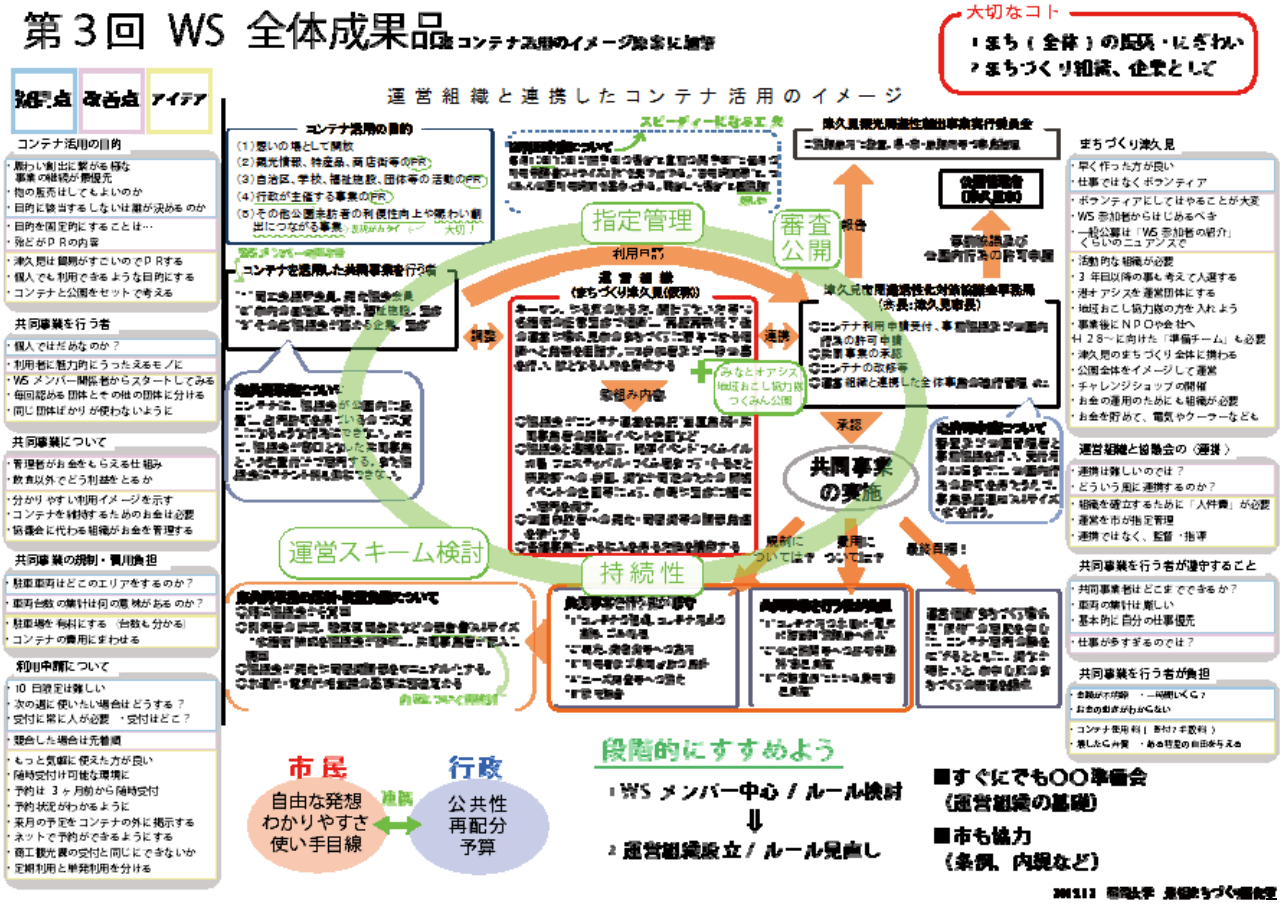

図-9 第3回 WS 全体成果品

運営組織の基礎となる準備会の立ち上げも早急に行っていくことを確認した(図-9)．最後にコンテナの名称のアンケートを開票した結果，「コンテナ293(ツクミ)号」が最も多くの票を得たため，コンテナの名称はコンテナ293(ツクミ)号で決定することとした．

4. つくみん公園ヒアリング実態調査

本研究ではつくみん公園を対象につくみん公園の利用実態やコンテナ設置後におけるコンテナの利用状況，利用者意識の把握を目的とし，コンテナ設置前と設置後の2回にわたりヒアリング実態調査を行っている．以下にヒアリング実態調査結果を詳述する．

(1) つくみん公園の利用実態およびニーズの把握

平成 27 年 6 月 1 日(月)～6 月 2 日(火)に大分大学が，平成 27 年 6 月 6 日(土)～6 月 7 日(日)に福岡大学と市役所が，つくみん公園の利用実態やニーズを把握することを目的とし，平日と休日の各 2 日間にわたりヒアリング実態調査を実施した．調査時間は利用者の来場が多く見込まれる 9 時～18 時に設定した．質問項目は，つくみん公園の利用頻度，時間帯，目的，津久見市街地に求めるものなど 10 項目とした(表-3)．その結果，平日で 44 部，休日で 172 部，計 216 部の回答を得た．これより，平日は高齢者単独の利用が多く，休日は 30 代の子供連れの利用が多い等，公園利用者の特徴が顕著に表れた(表-4)．また津久見市街地に対する要望を聴取したところ，「飲食店が欲しい」「つくみん公園に木陰がほしい」などの具体的な意見が得られ，つくみん公園の更なる賑わい創出を検討する基礎資料となった．さらに本調査に加えて第 0 回 WS において，「商店街になにがあるのかわからない」「まちなかの情報が伝わって来ない」という意見が多く挙がったことを受け，商店街の実態を把握するための実地調査も併せて行った．その結果，つくみん公園に多くの人が集まっている一方で市街地側での人の回遊の少なさが把握された．また商店街を構成する店舗が営業しているかどうか区別のつかない状況も多く確認された．

(2) コンテナ設置後における利用者意識の変化

社会実験開始(コンテナ設置)後のつくみん公園来場者の利用実態ならびに意識等を速報として把握することを目的にヒアリング実態調査を実施した．併せて，コンテナ内に設置された地図・パンフレット等の観光情報発信がもたらす効果についても把握を試みた．調査日は平成27年11月21日(土)～11月24日(火)の4日間であり，調査時間は10時～17時とし，質問項目として，コンテナ設置前後の賑わいの変化やコンテナの満足度，津久見市の情報発信の評価など13項目を設定した(表-5)．その結果，平日で20部，休日で131部，計151部の回答を得た．「コンテナ設置後つくみん公園の賑わいが向上したと思いますか」という質問に対し，休日では37%の人が「思う」と回答した(表-6)．しかし，平日及び休日共に「どちらでもない」という意見が最も多く，「コンテナ自体に人が集まっているのは見るが，つくみん公園の賑わいに影響を及ぼしたかはわからない」という意見を合わせると，利用者にとってつくみん公園の賑わいが強化されたという実感については，調査時では確認しにくい状況であった．つぎに「コンテナ内の観光情報を参考に市街地に出向こうと感じますか」という質問に対しては，休日で「とても感じる」「やや感じる」の合計は36%であり，「どちらでもない」と回答した人が過半数を超えていた．これよりコンテナ内の観光情報から市街地に興味を示す人は多いものの，「シャッターの店ばかりで足が遠のく」「商店街に子供連れでは入りづらい」などの意見も考慮すると，実際に市街地に足を運ぶことには躊躇しているとも捉えられる．

表-3 ヒアリング実態調査質問項目

質問項目			
問1	性別，年代，職業	問6	つくみん公園の満足度
問2	同伴者	問7	利用目的
問3	住まい，移動手段	問8	つくみん公園に求めるもの
問4	利用頻度	問9	つくみん公園の利用前後に立ち寄る施設
問5	利用時間帯	問10	津久見市街地に求めるもの

表-4 公園への同伴者と津久見市街地に対する要望

問2	平日	休日	問10	平日	休日
子供	13人(24)	16人(10)	空き地，空き家対策	3人(8)	8人(4)
			買い物が出来る店	10人(28)	29人(17)
家族	14人(26)	114人(75)	津久見市の情報発進の場	1人(3)	8人(5)
			飲食店	1人(3)	41人(23)
親戚	1人(2)	3人(2)	休憩場所	3人(8)	10人(6)
			公共交通機関	2人(6)	5人(3)
友人	8人(15)	14人(9)	お祭り・イベント	3人(8)	13人(7)
			福祉施設	0人(0)	2人(1)
その他	18人(33)	6人(4)	その他	13人(36)	59人(34)

表-5 コンテナ設置後ヒアリング実態調査質問項目

質問項目			
問1	性別，年代，住まい，移動手段，職業	問8	コンテナ設置後つくみん公園の賑わいが向上したと思いますか
問2	同伴者	問9	コンテナの満足度
問3	利用頻度	問10	問9で「満足」「やや満足」と答えた方のみ→コンテナのどこに魅力を感じるか
問4	利用時間帯	問11	コンテナの中で津久見の観光情報を提示していることを知っているか
問5	つくみん公園の満足度	問12	コンテナ内の観光情報を参考にして市街地(商店街)に出向こうと感じるか
問6	利用目的	問13	津久見の情報の発進は十分であると思うか
問7	コンテナ利用の有無		

表-6 公園の賑わいの評価と市街地に関する意識調査

問8	平日	休日	問12	平日	休日
思う	0(0)	49(37)	とても感じる	1(5)	16(12)
思わない	3(15)	12(9)	やや感じる	1(5)	31(24)
			どちらともいえない	16(80)	71(54)
どちらでもない	17(85)	70(54)	あまり感じない	1(5)	11(8)
			全く感じない	1(5)	2(2)

5. 地方都市における市街地の賑わい創出に向けた社会実験プロセスの要点

⑴ コアメンバーの形成と第三者の助言ならびに実験実施の効果的なタイミング

前述したように津久見市には清掃活動やイベントを行う等，以前より市民団体を主体とした地域づくりの諸活動が行われてきた．本事業はそれらを踏まえコアメンバーを選定し，第 0 回 WS を行う等，コアメンバーを筆頭に検討を重ねてきた．さらに本事業では大学が参画し，津久見市や WS 参加者らに社会実験を行う際の専門的なアドバイスや運営組織の設立にあたっての他事例紹介などが行われた．その結果，行動意欲はありつつも場所や費用等の面で具体的な行動に移せなかった地域住民が結集できる場の創造とそれらを活用した効果的な社会実験の提案により，実験実施に向けた集中的な議論が進められた．このことから，活性化を目的とした社会実験の推進には，事業を主導できる協力的かつ意欲的なコアメンバーの形成と事業にまつわる第三者の助言に加え，効果的なタイミングで実験を実施することが有効であると示唆できよう．

⑵ 空間の見える化が及ぼす当事者意識の向上

本事業では，社会実験がもたらす空間の暫定利用と仮設施設の導入，さらに WS 等において実験実施に向けた集中的な協議が行われたこと，の 2 点によってコンテナの設置及び運営が短期間で実施されることとなった．その結果，多くの来訪者を有するつくみん公園に新たな憩いの空間がうまれた．その後，津久見市のまちづくりについて定期的に話し合う「事業打ち合わせ会」の自主的な開催や事業 3 年目に熟考する予定であった継続的な運営体制について「もっと初期段階で議論すべき」との意見が挙がる等，地域住民の事業に対する積極的な姿勢が見受けられるようになった．すなわち，事業の早い段階で目に見える形として空間が創出されることは，地域住民ならびに行政関係者の当事者意識を向上させ，住民主体のまちづくりを促進させる可能性が挙げられよう．

⑶ 本事業 1 年目の成果と今後の展望

前述のヒアリング実態調査よりつくみん公園には定常的に市内外の利用者が見込めることが明らかとなった．よって市街地に隣接したつくみん公園に賑わいの場をつくることで，まちなかに人を呼び込む仕掛けとすることを企図し，1年目はあえてつくみん公園での社会実験を実施した．さらにつくみん公園のどこで社会実験を行うかという議論では，2年目に予定しているまちなかでの取り組みを踏まえ，公園内でもまちとのつながりを感じられる点や，社会実験終了後の取り組みをも見据えた将来的な都市計画の用途地域の変更に対応できる点を考慮し，コンテナを公園の端に設置した．その結果，1年目に効果の得やすい対象地を選定したことが，地域住民のまちづくりへの機運をさらに高めるとともに，2年目のまちなかでの取り組みの足掛かりとなりつつある．加えてコンテナ設置後，コアメンバーを中心に早急にコンテナ運営を開始できたことやNPO法人の立ち上げ準備を行う等，継続的な事業に不可欠な組織化の動きが始まったことも現時点の成果といえよう．このことから本事業は，中心市街地活性化に向けた社会実験における戦略的かつ長期的な計画の重要性を示唆するとともに，今後の経過観察を行っていくことが必要である．

参考文献

1) 佐賀市街なか再生社会実験実施業務報告書：第 1 章-1 社会実験の実施報告，pp.2-3，2012
2) 津久見市：「市中心部商店街の変遷」資料
3) 津久見市 HP：まちづくり・コミュニティ「みなとオアシス津久見」
4) 津久見市 HP：まちづくり・コミュニティ「都市計画マスタープラン」
5) 津久見市：都市計画マスタープラン 全体構想「都市の特性・問題点と課題」資料，2010

(2016. 4. 22 受付)